

オリンピック・パラリンピアンが参加 新年会員懇談会

今年の経済同友会・同友クラブ合同の新年会員懇親会では、竹田恆和JOC会長、ロサンゼルス五輪柔道金メダリスト山下泰裕氏が講演し、五輪招致への情熱と道のりを語った。また、12年ロンドン大会で日本国民の歓喜を沸かせたオリンピック、パラリンピアンを招いた懇親会も開催した。



■来賓講演 1

2020年招致は ラストチャンスである



竹田 恆和 氏

日本オリンピック委員会 (JOC) 会長
東京2020オリンピック・パラリンピック
招致委員会 理事長

昨年開催されたロンドン五輪で日本選手団は、過去最多の38のメダルを獲得した。また、大会全体を振り返ると、どの会場も人にあふれ、熱気にあふれた素晴らしい大会であった。負けた選手にも声援を送る市民の姿に、成熟した国の五輪であると強く実感した。

このロンドン大会が残したレガシーは、持続可能性と将来への遺産だった。東部再開発によって誕生した五輪公園は、今後、英国スポーツの拠点となる。また、スポーツをする子どもたちを増

やすための振興策も実施された。

こうしたレガシーをぜひ日本にも残すべく、東京五輪招致を何としても成功させたい。前回16年大会招致の経験をベースにし、さらにレベルの高い計画を作り、既に活動を開始している。

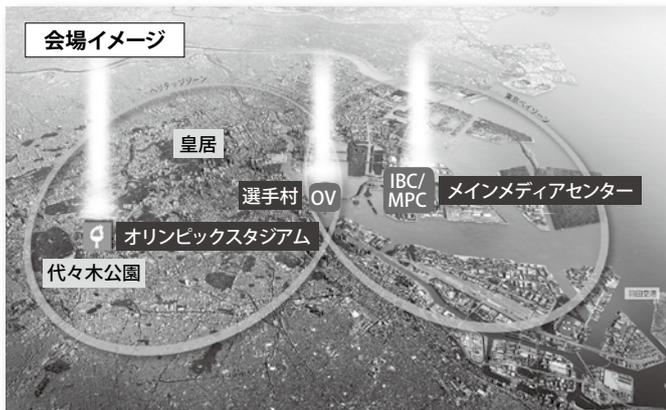
なぜ日本で行うのか、それは1964年大会の感動を、21世紀の若者にも伝えたいからだ。それは東日本大震災からの復興の力にもなり、また世界に復興の進行と感謝を伝えることにもなる。

ではなぜ東京か、IOCが求める条件に最も適合しているのが東京だからである。インフラやホテルなどが整備され、資金をかけず実施できる。都は既に4,000億円の準備金を用意しており、税制面で都民に影響を与えることもな

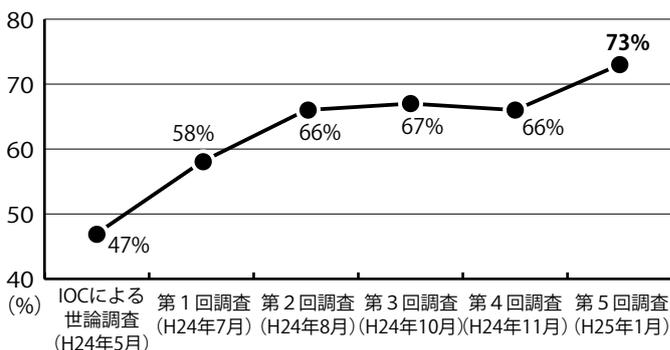
い。逆に3兆円の経済効果、16万人の雇用を生み出すと試算される。これを東北の復興にどう結び付けられるかを、われわれは考えていきたい。

大会のスローガンは、「今、ニッポンにはこの夢の力が必要だ!」である。それを実現するべく、安心・安全・確実な大会という三つの約束を世界に掲げていきたい。具体的な大会計画において16年計画から最も変わった点は、選手村である。敷地を40%拡大し、そこから8km圏内に28競技の会場を用意する。また、国立競技場を改築し、五輪のメインスタジアムとする。

東京には環境・気象への対策、エネルギー問題、国民支持率という三つの課題が残されている。しかし、もし2020年大会のチャンスを逃すことがあれば、ライバル国の動向から日本に今後五輪が来るのは難しくなる。是が非でも、このチャンスを勝ち取りたい。



2020年東京オリンピック・パラリンピック支持率の推移





山下 泰裕 氏

東海大学 副学長
ロサンゼルス・オリンピック
金メダリスト

■来賓講演 2

オリンピックへの 熱き思いを語る

東京五輪の感動が 私の原点だった

1964年東京五輪の際、私は熊本の山中に住む7歳の小学生だった。放課後はテレビの前にかじりつき、日本選手を応援した。重量挙げの三宅義信選手、男子体操、「東洋の魔女」と呼ばれた女子バレー、マラソンの円谷幸吉選手の活躍は今でも印象に残っており、その後の人生に非常に大きな影響を与えた。

実はその時はまだ柔道を知らなかった。柔道と出会ったのは小学4年生の頃で、「大変な問題児」だった私には堂々と暴れられるびつりの競技だった。柔道の激しさに惹かれ、素晴らしい指導者にも恵まれた私には、五輪出場のチャンスが3回あった。76年モントリオール五輪、80年モスクワ五輪、84年ロス五輪である。しかし、モントリオールは補欠に終わり、2度目のモスクワ五輪は、ソ連のアフガニスタン侵攻で日本は参加をボイコットするに至った。私は「幻の五輪選手」の1人になった。

その時、松前重義先生(当時東海大総長)から「モスクワ五輪を見に行かないか」とのお誘いを受けた。有り難いお話だったが、私の心には二つの不安があった。一つは「日本がボイコットしたのに行ってはたかかれるのでは」という不安、もう一つは「会場を見た途端無念の思いに駆られるのでは」と

いう不安だ。友人に「心配するな」と励まされた私は、行くことに決めた。

結果、マスコミにたたかれることはなかった。加えて、無念な気持ちも起きなかった。世界の多くの柔道家たちが、私に声をかけてくれた。当時右足腓骨をけがしていた私は、「大丈夫か」と、逆に励まされたのだ。この時初めて、スポーツによる友好親善を肌で感じることができた。すっきりした気持ちで、私はロス五輪を目指すことになった。

五輪の頂上決戦で得た フェアプレーの精神

ロス五輪では、やるべきことを尽くして、参加したはずだった。しかし2回戦、右ふくらはぎを肉離れしてしまった。右足で勝負してきた私にとっては、深刻なダメージだった。苦しい中なんとか決勝まで進んだが、佐藤宣践監督が「投げられる。一本取られなければ負けなから、それからしがみついて勝て」とおっしゃるほど、傷は深刻だった。

しかし予想外の出来事が起きた。決勝の相手は、エジプトのラシュワン選手。開始直後、彼は技を空振りし、その勢いで倒れたのだ。そのまま抑え込み私は勝ったが、100回に一度あるかという幸運な勝利だった。

ラシュワン選手は試合後、記者に「なぜ右足を攻めなかった」と突き上げられた。しかし彼はこう答えた。「アラブ人の誇りだ。あのヤマシ

タに、そんな卑怯なことはできない」と。周囲の人間は皆、一転して拍手を送り、彼はユネスコのフェアプレー賞を受賞した。

五輪選手は皆、国の誇りを胸に全力で試合に臨む。徹底的に戦う。しかしひとたび試合を離れると、同じ目標に向かって努力した相手を理解し、尊敬することができる。そうして得た人間関係は、一生の宝となった。

ともあれ私は、五輪の表彰台の一番上に立つという夢をかなえることができた。中学2年生の時から、「柔道の強い高校、大学に進み、五輪に出たい。五輪に出たら、表彰台の一番上でメインポールに掲げられた日の丸を見ながら、君が代を聞きたい」と、願ってきた。金メダルが欲しいのではなく、日の丸と君が代が夢だった。それは間違いなく、東京五輪の時に見たあの感動を追っていたからだった。多くの人の支えと励まして夢を実現できた自分は、世界で一番幸せな男だと思った。

夢を持つ素晴らしさを訴え 日本の素晴らしさを訴える大会に

このように私は、自分の夢を達成するために五輪を戦った。だから金を獲った後が、社会への恩返しが始まりだと思った。

夢を持つこと、持ち続けることの大切さは、どんな世界であっても非常に大きな意味がある。次の世代が夢を持つ社会にしていくことは、われわれ大人の責任だ。



オリンピック・スタジアム外観イメージ図
新国立競技場基本構想国際デザイン・コンクールにおける最優秀賞受賞作品



64年大会の頃、日本は発展途上国そのものだった。しかし、子どもたちの目は輝いていた、夢を持っていた。そういう社会を、われわれはつくらなくてはならない。2020年大会招致を通

して、私は子どもたちに夢、明るい笑顔を描ける環境をつくっていきたく思っている。

そして、スポーツのフェアな精神も訴えていきたい。私が会長を務めている神奈川県体育協会では、「フェアプレーの精神を日常生活でも」を合言葉にしている。スポーツの力で、フェアで思いやりのあふれた世界をつくりたい。

私は06年、柔道を通じた国際交流を行うためのNPO法人「柔道教育ソリダ

リティー」を設立した。柔道用品の配布や指導者・選手の受け入れ・交流などを通じて、「柔の心、和の心、日本の心」を世界に発信していきたいと考えている。

日本は、もっと日本に自信を持ち、日本の素晴らしさを世界に訴えていくべきだ。英BBCの調査では、日本は世界に対し良い影響を与える国第1位である。東日本大震災の混乱の中、秩序を乱さず、思いやりの力で復興しようとしている日本。私は五輪招致を通じて、日本の心を世界に知ってもらいたいと思う。



交流会
オリンピック・パラリンピアンとの交流

左から、上田春佳選手(競泳・ロンドン五輪銅メダル)、杉本美香選手(柔道・同五輪銀メダル)、田口亜希選手(射撃・同パラリンピック出場)、吉田沙保里選手(レスリング・同五輪金メダル)

交流会は、同友クラブの岩沙弘道理事長の乾杯で始まった。続いてオリンピック・パラリンピアンが登壇し、新浪剛史東京オリンピック・パラリンピック招致推進PT委員長によるインタビューが行われた。2020年東京大会招致への想いを尋ねたところ、吉田選手からは「国民の皆さまに生で応援していただくチャンス。ぜひ東京で開催してもらいたいし、私も出場したい」と熱い意気込みが語られた。

会場では、障がい者雇用を積極的に進めるスワンベーカーより、参加者へのパンの提供も頂いた。新年会員懇談会は、会員とオリンピック・パラリンピアンとの交流も活発に行われ、笑顔あふれる会合となった。

